

The Weekly Yomiuri

# 週刊読売

1983

10/2

220円

**風俗最前線** **ラブホテル** 東大教授、銀行幹部もオーナーに

## 特報 重信房子単独会見記

日本赤軍は全員ベカー高原にいた



失敗した岡本公三(テルアビブ事件)奪還作戦  
「超法規」出国の狼グループは今



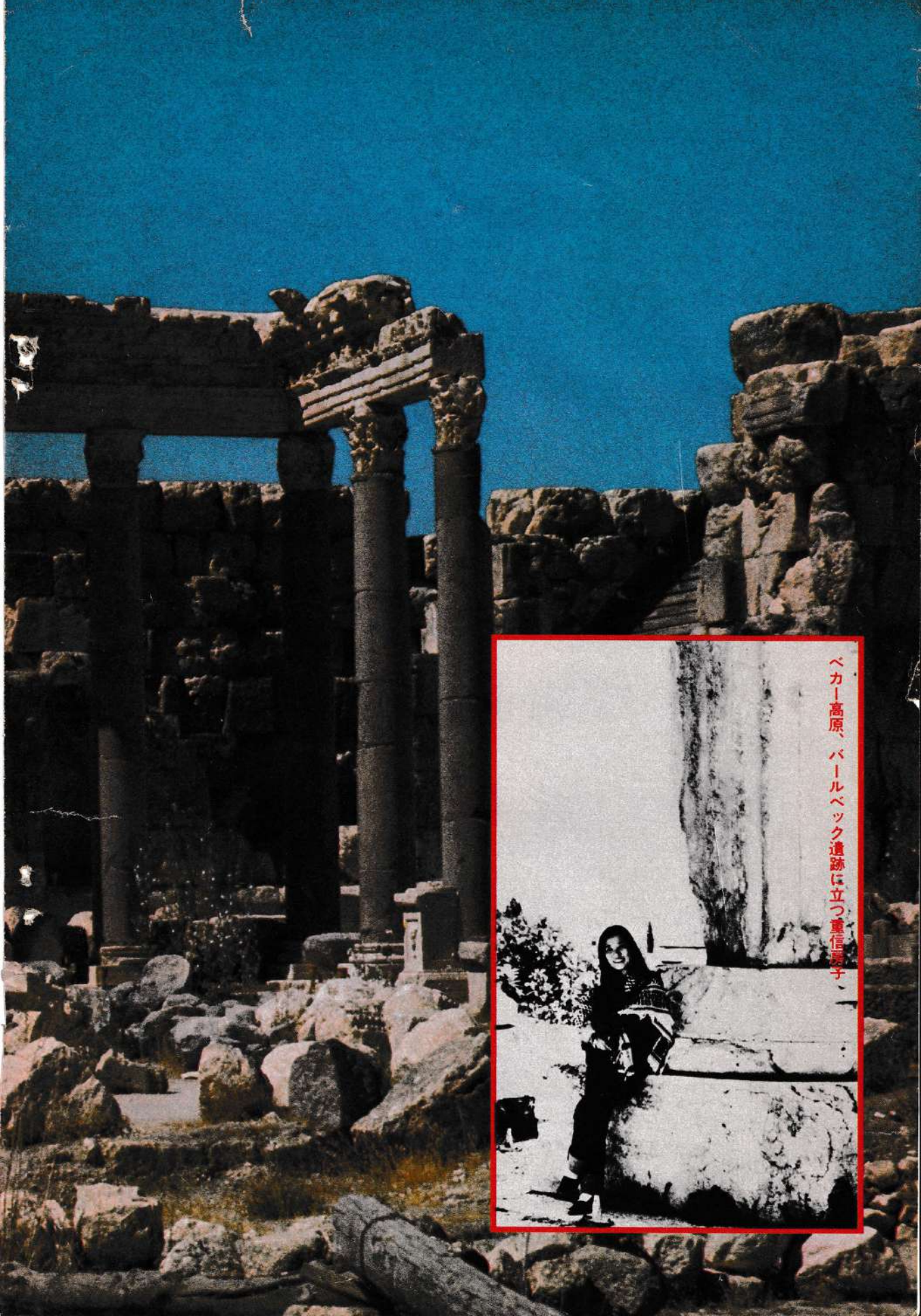
本文参照

# 日本赤軍の重信房子は、 ベカー高原に現れた



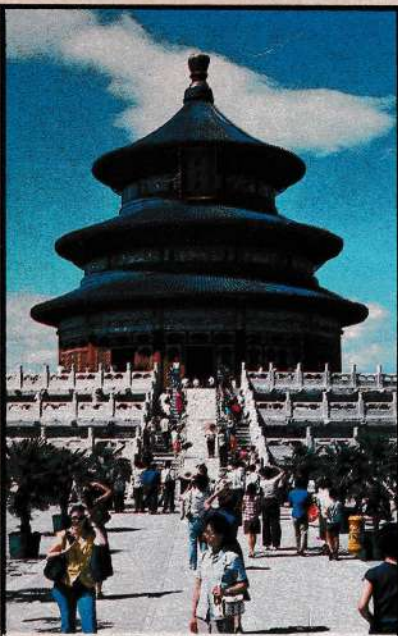
「日本赤軍は全員、生きてベカー高原の最前線に戻ったわ」  
昨年夏、イスラエル軍の包囲網をかくぐって、ペイルストから脱出した日本赤軍のリーダー、重信房子(三宅)は、ほぼ一年ぶりに、レバノン南部、イスラエル国境線近くのベカー高原に姿を現した。肩までかかるトレードマークの黒髪と、さわやかな弁舌は相変わらずだったが、  
「みんな、よく命が繋がったという感じね」  
とゆったり組んだ手の指には、この十二年間の厳しさがにじんでいるようだった。





ペカー高原、パールベック遺跡に立つ重信妻子





ご家庭に、旅行に、  
**便利な常備薬**

天壇印清涼油は中国上海の家庭用常備薬です。捻挫、うちみ、肩こり、筋肉疲労など、患部によくすりこんでご使用ください。リウマチ神経痛、腰痛などにも効果があります。

●天壇印清涼油には白・茶の2色とそれぞれ、家庭用大缶(19グラム)と携帯に便利な小缶(3.5グラム)があります。



**天壇印清涼油**

中国土産畜産輸出入公司  
上海市土産分公司

住所：上海市滇池路18号

ケーブル：CHINAPROCO SHANGHAI

テレックス：33060 CNPCSCN

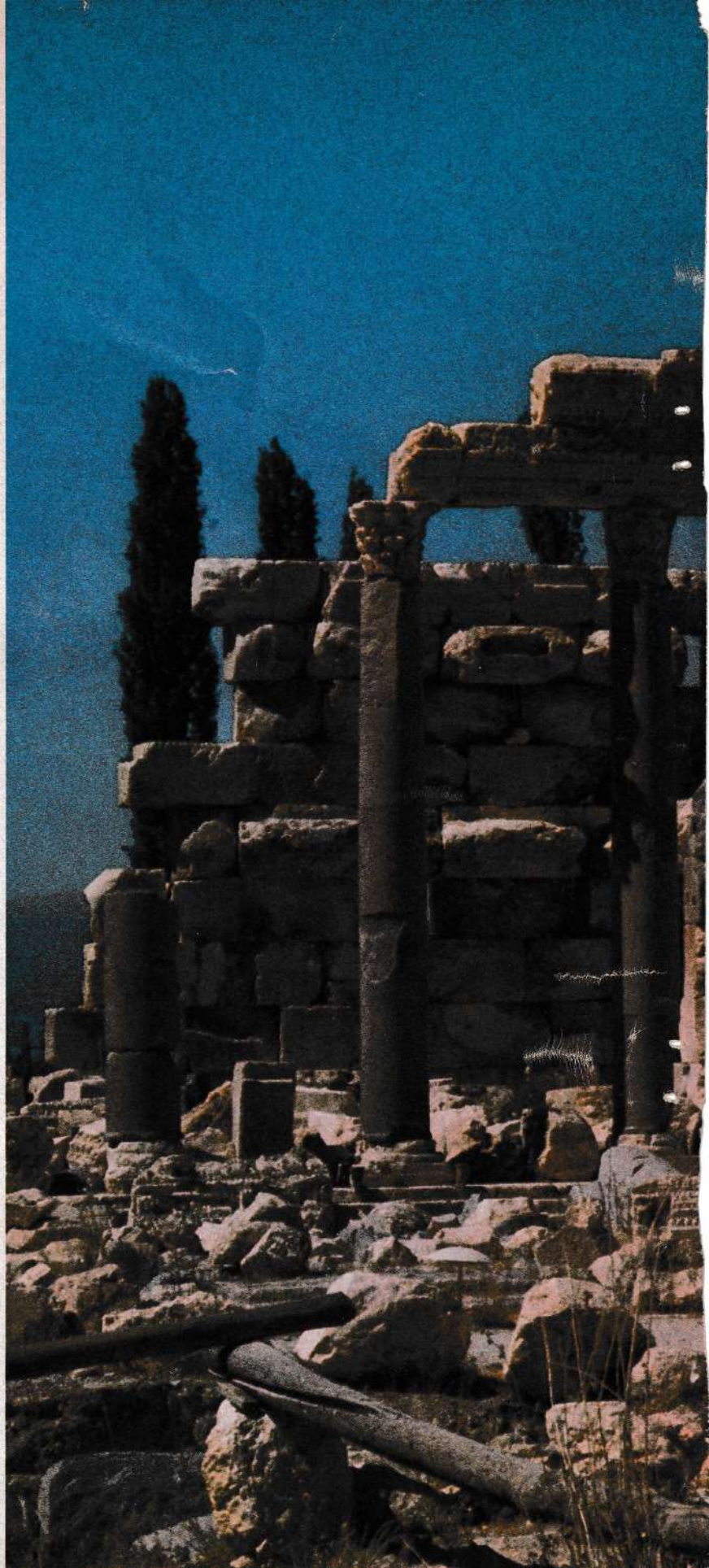
●輸入発売元

松浦薬業株式会社

名古屋(052)962-8801 東京(03)728-5861

株式会社日東漢薬

東京(03)357-1952







ベカー高原には、昨年ベイルートを脱出したパレスチナゲリラが結集し、イスラエルと対峙している。

特報!!

日本赤軍

### 重信房子単独会見記

フォト・ジャーナリスト 広河隆一

▶日本赤軍はいまどこに…そして何を… 16  
 ▶超法規的措置で出国したメンバーは?… 16  
 ▶ペイルートからの脱出⑧作戦—ほか 25

新ダイアナ・ファッションが英王室を華麗に変身させた…156

風俗最前線 ラブホテル3兆円産業を支える意外な主役たち ● 東大教授、銀行マン、高校教師らも続々オーナーに 164

巨人VS西武—日本シリーズ研究① 西武のホームラン打線は怖くないというこれだけのデータ…160

富士山大爆発せず 予言で稼ぎまくった…26 銀座「ベンツ・ママ」1億5千万申告漏れ…162

新連載! レー対談③ おもしろまじめアナのちよっトーク ゲスト阿川泰子…40

小説 旅と恋と殺人と③ 作・西村京太郎 え・中州ざざ…50

小説 パリ経由 夕闇のパレスチナ③ 作・胡桃沢耕史 え・峰岸達…132

新連載 経済ドキュメント ハイテク列島縦断—先端企業どこが生き残る③ 梶原一明…34

医療キャンペーン「遠藤周作のみんなで考えよう心あたかな病院」③…150

スポーツドキュメント ザ・ラグビー 西の新星 日新製鋼の強さともろさ 146

岩本久則の4ページマンガ スーパーTeaギャル風子③…67

天国まであと8マイル 今週のトピックス/私とデートしませんかほか…128

グラビア

新連載 ●私のDIY体験  
 <カラー> ●地球の仲間 ●美—20選

日本赤軍・重信房子は「最前線」に戻っていた  
 東大野球部入りたさに、五浪した九州男児  
 18歳未満専用の自動車教習所ついに登場  
 元総理の孫に嫁ぐ、前首相の三女  
 早大のオカシナ、オカシナ仲間「万才同盟」  
 小柳ルミ子—ヌードと芸術を語る—(ほか)  
 水野晴郎の新シネマガイド  
 私が選んだ味のれん(鈴木 博)  
 高田繁のクリーン球談/NHK「徳川家康」

NEWS COMPO

秋というのに「暑」いビール戦争28/「生野菜は女をダメにする」…31  
 門前仲町は「下町の六本木」? 29/勝新の復帰告げる太鼓の音…32  
 ブローニュの森は野外性交場30/聖子が「大人」のドラマ初主演33

新登場

親父と子どもの大学受験学…49  
 読売新聞特派員夫人による「こちらの暮らし」…111  
 谷沢永一(関西大教授)の本の散歩道…114  
 毎号賞金が当たるクロスワード・コント…82  
 ハロー電話英会話入門…74/戦うフランス料理…107  
 テクノサイエンス…139/ダメ男釣り日記…121  
 Ballade'83(女性のページ)104/ヘルシー・ライフ…108

評判です。



標準小売価格/3袋入り150円

理研ビタミン株式会社

好評連載

東奔西走大絶讃 永 六輔…56  
 閑居独笑 佐藤愛子…72  
 読者の投稿で作る「シャレ・アップ!」…58  
 ムツゴロウの自然を食べる 畑 正憲…124  
 カラオケで「いい感じ」といわれる唄い方「おまえに」曾根幸明…122  
 読売新聞大阪社会部が編集するページ…126  
 ヨーロッパ通信 田淵安一 112/寄らば斬るぞ!!・ニューディスク…79  
 ブックレビュー…116/碁将棋・見もの聞きもの…80  
 ベスト10…145/ゴルフ…118/情報スポット…100  
 画家のひと言/ジャイアンツクイズ・懸賞クロスワード・コント当選者 169  
 肉—曼陀羅…99 寶石笛…170 マン すっから母さん 植田まさし…103  
 エジプト4000年の美の歴史…140 ガ 笑いのゲリラ 鈴木義司…155

<表紙> ■デザイン・斎藤久雄

日本赤軍

# 重信房子単独会見記

## ベカー高原キャンプで

上

フォト・ジャーナリスト 広河隆一

日本赤軍は、今年夏にベイルートで、何をしていたのか

昨年夏の激しいベイルート戦争の後、プツリと行方が分からなくなっていたけど、今、現在、日本赤軍はどこにいて、何をしているのか。

「われわれは、誰一人死ぬこともなく、逮捕された人もいないし、全員が、再びベカー高原の最前線に戻っていますよ。ベイルートを一時撤退する時、『最前線にまた戻ろう』という前提で出たわけだから。」

今、ベカーには、ベイルートで戦って死んだレバノンの人や、パレスチナの人たちなどの数より、もっと多くの人たち

日本赤軍は、昨年八月のイスラエル軍のベイルート包囲、そして、これに続くPLO（パレスチナ解放機構）のベイルートからの全員撤退の後、プツリと行方をくらませてしまった。居所はもちろん、生死すらも全く不明のまま、ほぼ一年が経過したが、このほど日本赤軍のリーダー、重信房子（三七）が、中東を取材中の報道写真家、広河隆一氏の前に突然、姿

が結集していますよ」

——日本赤軍の人数は？

「ちょっといえません、ノーコメントです。人数はね」

——昨年レバノン戦争で、日本赤軍はケガ人も出なかったのか。

「まあ、日本人の感覚でいえば、重傷なんだろうけど、こちらでは、軽いケガぐらいは負った人もいたんじゃないかな。とにかく戦いに慣れているんですよ。言葉はもちろんだ、道も知り尽くしているし、決して孤立するなんてことはなかった。」

決死隊の人たちも、弾を撃ち尽くして、

を見せ、インタビュに応じた。以下は本誌が入手した二人の一问一答である。 Ⅱ グラビア参照 Ⅱ (編集部)

みんな、無事に帰って来たほです」

——これまで、どこにいるか明らかにしたことがない日本赤軍が、今、ベカー高原にいてと明言する理由は何か。ベカーだつて、レバノン南部のように、相当厳しい情勢だが。

「そうですね、こちらから『ここにいますから、来てください』というほど積極的でもないけど、別に隠すことでもないのね。また、新しい戦場はいろいろな地域に拡大していくものだし。私たちも、独自の戦いの領域として、日帝とのシビアな戦いがあるけど、むしろ、もっとこ

自家用自動車総合保険



今日の幸せを明日につなぐ...

同和火災

大 阪 / 〒530 大阪市北区西天満 4-15-10 ☎06(363)1121(大代)  
東 京 / 〒103 東京都中央区日本橋3-5-15 ☎03(274)5511(大代)

※その他全国各地に290ヵ所あまりの支店・営業所網



# 本誌特報!



重信房子と右はインタビュー中の広河隆一氏

重信房子（37歳）アラブ名・マリム（ム）46年2月、テルアビブ空港襲撃事件で自爆した奥平剛士と偽装結婚してベイルート入り。日本赤軍の政治委員会のリーダーでもあり、国際ゲリラ組織とのパイプ役。

## 広河隆一氏（40歳）

昭和十八年天津生まれ。早大卒。外国通信社記者などを経て中東問題研究者として活躍。昨年九月、レバノンのサブラ・シャティールでのパレスチナ人の虐殺事件では、最初に現場に入ったジャーナリストで、この一連の写真で、五十七年度後期の「よみうり写真大賞」（報道部門）を受賞。著書に「ユダヤ国家とアラブゲリラ」「パレスチナ幻の国境」「ベイルート大虐殺」、訳書に「イスラエルからの証言」、写真集は「奪われた国の子供たち」「光と影のエルサレム」「ベイルート1982」など多数。

ここで積極的に自分たちが戦っていることを示しても、別に悪くはない。

しかし、非常に、よく命がなくなったという感じね。戦争という日常的な殺し合いに加えて、スパイの潜入だっているんだから……。

まあ、私たちは生きている限り戦い続けるわけだから、私たちが殺せなかったことは、イスラエルの失敗だったわね」

## PFLPと一緒に戦う

——その戦い方だけど、PLOの各組織に分散して、戦っているのか。

「PLOというより、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）と一緒に戦っています。もちろん他の組織とも話したり、付き合ったりするけど、基本的にはPFLPと一緒にです。昨年のレバノン戦争を経て、私たちとパレスチナの各組織の人たちとは、今が一番、強固な関係にあるんじゃないかしら」

——どんな生活ぶりか。全員が最前線の

## 福井県 芦原温泉

- 新幹線米原駅乗換(北陸本線)
- 北陸トンネル通過芦原温泉駅下車
- 北陸自動車道完成(名神・米原IC直結)



東尋坊  
長生風呂、プール  
政府登録国際観光旅館

# 八木

TEL 0776 (芦原)77-2008代表  
東京案内所 TEL 03(832)0556  
大阪案内所 TEL 06(631)1425  
名古屋案内所 TEL 052(541)9129



### インタビュアー実現までのいきさつ

この八月中旬に、今年になって四度目の中東取材に出かけた。レバノンのベカー高原の宿に泊まったある夜、宿の主人のバレスチナ人にたき起こされた。

「ちょっと来てくれ」と、あわただしくいうのである。

最前線のベカー高原では、何が起ころるか分からないため、私は、ベッドの脇に置いてある取材バッグをひたたくって、宿の主人に続いた。

彼に連れていかれたのは、バールベック(注・ベカー高原にあるローマ帝国の遺跡)から少し離れたところにあるPFLP(バレスチナ解放人民戦線)の事務所と思われる場所だった。

何ごとかと私がボカソとしていると、そこに現れたのは、新聞や雑誌の写真で見た、あの日本赤軍の重信房子だったのである。

私は、最初、何ごとが起こったのか分からず、きょとんとしていた。私にとって、日本赤軍はバレスチナ問題を研究したり、中東の報道をしているとき、必ず、任務についているのか。

「もちろん仕事の内容によって違うけど、兵舎での生活は、朝は六時半ぐらいに起きて、みんなで掃除をして、七時から七時半の間に食事をして、それぞれの任務につくわけ。食事は当番制で作るん

いつもどこかにひっかかる存在ではあったが、まさか、彼らに会うことなど一生ないだろうと思ってきたのだ。

いささか緊張している私を、彼女はにこやかに迎えた。「なぜ、私のことを知っているのか」。

彼女は、私のことは、中東研究の著書や写真集を見て、よく知っていると聞いた。たしかに、写真集などは、取材のお礼にP.L.O.(バレスチナ解放機構)の各機関にも寄贈してあるので、彼女の目に触れることもあったのかもしれない。

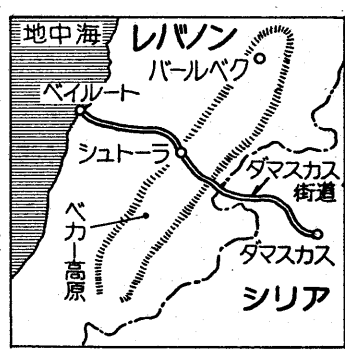
彼女は、私に「意見の交換がしたい」といった。しかし、私はジャーナリストである。「君と会ったことを報道する義務がある。もし、あなたが私のインタビューに応じてくれるというなら、あなたの要望に応じよう」といった。

すると、彼女は「インタビューがいいですよ」と承諾したのである。

満天に星が降るベカー高原で、夜中の二時半から夜明け近くまで、このインタビューは続いた。(広河隆一)

だけど、任務は、半数が最前線、残りが事務所活動といったところね。具体的にどうこうとはいえないけど。

国際的な諸組織との連携を担当する人たちは、共同で行う文書活動なども大変多いし、忙しい。それに、軍事訓練をや



っている人もいるし、訓練されている人もいます。

それに、ローテーションで、前線の任務についている人もいます。だから、兵舎に帰って来るのはまちまちで、昼食などは、そこにいる人だけで、当番制作ります。

大体、活動の方針は、年間、月間、さらに週間単位で、細かく総括して、それに基づいて、方向を決め、目標を立ててやるようにしています。

夜は、毎日、食事の後に総括会議を開きます。これは、組織生活を行っていくための相互教育を行うものです。私たちの場合、特に教育者がいて統制されるわけではないから、みんなで統制し合うことが大切です。

総括会議では自分の問題点や教訓を提起して、これに連動した相互批判や自己批判を行い、他人の問題は自分の問題として、自分の問題は他人の問題というふうに、みんなで考えようという姿勢です。

月間総括というのもあって、ここでは実際の活動の中で出た教訓や、失敗すれば、どうやってその失敗を克服するかを考える場です。バレスチナの人たちも一部で、われわれのやり方を真似ていますよ」

「毎日というけど、戦争のさなかでも「総括」を開いていたのか。

「開いていました。戦争の真っ最中こそ、総括を続ければ大きな意味があるわけ。戦略、戦術能力においても、軍事や軍術能力においても、一人が学んだことを十人以上が学べるわけね。

みんなで作ること、みんなでやるからこそ、ジグザグはあっても、みんなにとって、何が一番いいのかというところに行き着くのね」

### 本音でやる軍隊は強い

「総括」は、何か手本があって始めたのか。それとも独自に考え出したのか。

「それは七五年に敗北したことによります。(注・西川純と戸平和夫がストックホルムで逮捕され、日本へ強制送還後、自供したことを指すようだ)

赤軍は、とても強いつもりで、たとえ捕まっても、自供しないものだと思いつていたのね。

そこで、どうして敗北、つまり自供したのかじっくり考えてみた。最初は少数だったけど、一人から二人へと、『本音のところは、私はこんな人間です』という、回覧板を何となく自然発生的に回しはじめたのね。





その中で、子供の時は反省もできなかった、大人になるとメンツがあつてなかなかできない。でも、革命家の大切な勇気は決して銃を持つことだけではなく、自分の誤りを認める勇気だろうという素朴なことから出発しようとしたわけです。

そして、回覧板から反省会、それがさらに発展して、年間、月間、週間、そして毎日の『総括』になつたんです。

七四年の敗北(注・山田義昭がバリ・オルリ空港で偽造パスポートを持っていったため、仏当局に逮捕。手帳などから、

## 超法規的措置で出国し、合流したメンバーは…

組織の一部が明るみに出たことを指すようだ)は、単に私たちが敗北したということより、自分たちの敗北によって多くの人たちに、困難を強いし、情報が漏れて、暗殺される人が出るといふような事態にまでなつたのだから」

——余暇とかレジャー、楽しみといったものは。

「そうですね、余暇ってどんなことか分からないけど、みんなやるサッカーなんかそうね。足の内側がちよつと筋違になつたままなんだけど。

それに、アラブの人なんかはトランプをよくやるけど、私たちのほうは将棋ね。それから、詩を作ったり、作曲をしている人もいるわ。本を作っている人もいるし、でも、これが、みんな本音でやれているのがいんじゃない。

みんなエエカッコしても、別に見せる相手がいないんだから。

やっぱり本音が大切なよ。バレスチナ革命を見ていて、やっぱり本音でやる軍隊は強いなって分かるしね。決してボキンと折れないもの」

がやるからには、根拠があるんだろう」と思つて一緒にやりはじめたというのね。

### 「勝ちたい」から奪還

他の組織の人たち(注・連合赤軍や東アジア反日武装戦線)で、私たちに合流した人たちは、今になっては、笑つていうけど、当初は『この考えだけは引つ込めたくない』『日本赤軍には負けたくない』と、ひそかにフラクション(注・分派)をつくつて『絶対負けるな』といふ合つていたみたいだ。

でも、『自分は乗客の命を救うために来ただけだが、彼らは何か人間が違う人物だなと思つた。まあ、こういう人たち勝てるんだったら連赤(注・連合赤軍)

▲ベカー高原で見張りを続けるPLO兵士



泉博(46歳)

35年6月、東京・文京区で強盗殺人事件を起こし、無期懲役の判決を受け服役中、過激な待遇改善要求闘争を行う。ダッカ事件で超法規出国。



丸岡修(35歳)

(アラブ名・アブハッサン)48年の日航ジャンボ機ハイジャック事件のリーダー。

を真似た方がいいし、東アジア(注・東アジア反日武装戦線)を真似た方がいい。だけど、あれじゃ勝てない。だけど、連赤も東アジアも負けただけで、その人たちは総括すれば、一番、教訓を持っているはずでしょう。

だから、彼らを奪還しようとしたんです。

そう、『勝ちたい』『勝てる』というしっかりした考えがなくては、誰もついてこないと思うのよ。ヨーロッパから参加した人なんかは、ここに来て一番ビツクリするのは、みんな『勝てる』と思込んでいることだというのね」

——そうすると、新しく獄中から連れ出した人たちと対立はないわけか。

「みんな勝ちたいわけでしょう。勝ち



たいのは味方にじゃなくて、敵に勝ちたいわけよ。

敵に勝つためには、味方のいざこざは大したことじゃない。やり方の違いはかえって、戦術の多様性になる。

勝つためには、どうしたらいいのかわからない話をしていたら、泉水さんなんかは『こつやたら勝てるわ、いけそうやな』と、非常に創造的なわけ。

ところが学生上がりというか、社会的経験のない人は、理論的であろうとして、『そんなこと、レーニンがいつていな』などというって、非常に観念的になっってしまう。

そういう意味では、私もその一人かも知れない。こざかしく生きてきたと思う

# 昨年、イスラエル戦争時は、何をしていたか

——さて、日本赤軍は、昨年のあの激しいレバノン戦争を、どうやって生き抜いてきたのか。そして、イスラエルに包囲されたベイルートから、どうやって誰一人捕まらずに脱出できたのか。

「戦争の初期の頃、何とかイスラエル兵を捕まえて、岡本孝三を奪還しようとして接近戦をやったわ。」

敵は砲撃の後、戦車で上陸して来たんだけど、攻撃したら、三台の戦車を残して撤退したわけ。それをせん滅したシューア派イスラム教徒の人たちは、その上花を飾って踊りながらキャンプまで行

## 日本に用があれば帰る

——日本に帰りたいと思うか。あなたのお父さんが亡くなった時に、日本に帰りがたがっているとか、子供を日本で教育したいという記事もたまに見るが、本当のところは。

「私たちに描かれているのは、不毛な砂漠で銃を持って、困難な毎日を経験しているというようなことだろうけど、実態は全然、違っている。まず、砂漠は決して不毛ではないし、人と人の関係も温かいし、日本よりも豊かかもしれない。ごく自然に、当たり前前に生きて

進するのよ。

これを見て、私たちは『クソいいな』とうらやましがってね。

そこで柳の下の二匹目のどじょうを狙って、何とかイスラエル兵を捕まえようとしたけど、うまくいかないで、空爆ばかり受けてね。

このほかに、ハルデ（注・ベイルート近くの町）までイスラエル軍が来た時、日本赤軍は、男は黒いタスキをかけ、女子供はネッカチーフを巻いたアマルというシューア派イスラム教徒などと一緒に戦ったわ。

いるのね。

もし、日本に用事があれば帰るし、帰り方もみんなが考えているけど、そんなに難しくないと思っているの。

「ただ、今は仕事がたくさんあるし、本当にここで築いてきた戦いをやるべきだと思ってる。」

私たちがのように一部だけでも、外にいて、国内との戦いと結び合っていくことが、一つの大切なことなのね。

日本人特有の、言葉がでない、文化の違いになかなか慣れないというのを乗り越えてきて、パレスチナ革命で国際的にいろいろな人たちとも出会えるから、不自由というのは人が見ているほどでもないのよ。」

オリーブ畑から、執拗に出撃を繰り返していたのね。アマルの人たちは、本当に強くて、『アラール・アクバル（神は偉大なり）』といながら、小さな一人用のタコツボを掘って、そこで、猛烈な空爆や砲撃に耐えているのよ。

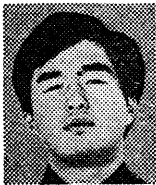
だから、オリーブ畑から出撃するわが軍が、砲撃の段階で『退け』なんていうことになる、タコツボにいる連中から『お前らは、逃亡軍か』と、銃弾が飛んでくることもあったりしてね、相当大変だったのよ。

それから、シャティイラキャンプを防



奥平 純三(34歳)

（バーセル）テルアビブ空港事件で自爆した奥平剛士の実弟。「兄の遺志を継ぐ」と日本赤軍に合流した。



山田 義昭(34歳)

（シーハード）49年7月、パリのオリ空港で偽造旅券を持っていて逮捕されたが、同年9月のハーク事件で釈放、シリアへ。



西川 純(32歳)

（カーリッド）49年のハーク事件に参加。50年に戸平とともにストックホルムで逮捕、日本へ強制送還されたが、クアラルンプール事件で超法規出国した。



戸平 和夫(30歳)

（ケファー）50年、西川とストックホルムで逮捕され、強制送還されたが、超法規出国。



衛している私たちの部隊は、グリーンラ  
イン（注・東西ペイルートの境界線）の  
外れで任務について、バーバダ大統領府  
を占領したイスラエル軍と対峙してい  
たわ」  
——レバノン南部のほうには、日本赤軍  
はいなかったのか。

### 〈日本赤軍の主な事件〉

●テルアビブ空港事件（47年5月30日）  
奥平剛士、安田安之、岡本公三がイスラ  
エルのテルアビブのロッド空港を自動小  
銃と手投げ弾で襲撃、約百人の死傷者を出した。奥平、安田は自爆、岡本は逮捕され、イスラエルで服役中（無期懲役）。  
日本赤軍は、この事件をアラビア語で、  
リツダ闘争と呼んでいる。  
●日航機ハイジャック事件（48年7月20日）  
丸岡修とパレスチナ・ゲリラがパリ発東京行きの日航ジャンボ機（乗客ら百四十五人）をハイジャック、リビアのベンガジで乗客を釈放後、機体を爆破、リビア政府に投降後、国外追放。  
●シンガポール事件（49年1月31日）和光晴生ら二人の赤軍コマンドと、パレスチナ・ゲリラ二人がシンガポールのシェル製油所を爆破、フェリーボートを奪って、乗員を人質にした。2月6日、別のパレスチナ・ゲリラ五人が在クウェート日本大使館を襲い、大使らと引き換えに和光らとクウェートで合流、南イエメン

「ナバタイエを中心に戦って、撤退、逃走して、『とにかく、ペイルートに行かなければ話にならない』と、何日もかけてベカー高原に出て、その後、イスラエルの包囲網をかくぐって、ペイルート突入作戦をやったわ。やれども、やれども押し戻されたけど。」

に投降後、逃亡。

●ハীগ事件（49年9月13日）和光、奥平純三、西川純の三人が在ハীগ仏大使館を襲い、大使らを入質に、旅券偽造などで仏当局に逮捕された山田義昭を奪還、オランダ当局から現金三十万ドルを出させ、仏機でシリアのダマスカスで投降後、釈放。  
●クアラルンプール事件（50年8月4日）奥平ら五人が、在マレーシア米大使館を襲い、領事らを入質に、日本で拘留中の西川、戸平和夫と坂東国男、松田久、佐々木規夫らと、いわゆる超法規的措置で出国させ、ともにリビアのトリポリで投降後、逃亡。

●タツカ事件（52年9月28日）丸岡、坂東、佐々木ら五人がインド上空で、パリ発東京行きの日航機（乗客ら百五十六人）をハイジャック。パングラデシユのダツカで、再び超法規的措置で、奥平、大道寺あや子、浴田由紀子、城崎勉、泉水博、仁平映ら六人を釈放させ、六百万ドル（当時の為替レートで十六億円）とともに全員がアルジェリアへ逃亡した。

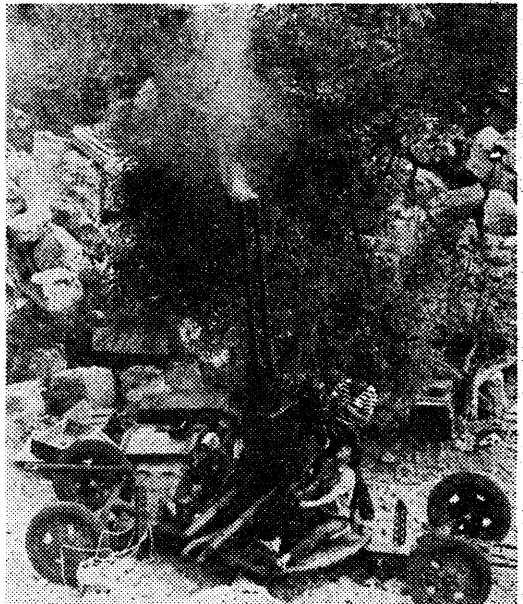
屋はイスラエル軍と戦って、夜は斥候隊をやって、何とかペイルートの潜入ルートを探そうとして大変だったのね。  
ある時、イスラエル軍に包囲されて、民家に逃げ込んだ時、お茶を出してくれた家の人に『あなたは何人』と聞かれて、とっさに『パングラデシユです』と、ごまかしたりして、まさに危機一髪だったことも。

### 顔も隠さず伸び伸びと

でも、戦争中は、これまで保安上の理由で行けなかった所にも自由に行けるし、配属された部署で、顔も隠さないうで、伸び伸びやれたし、みんな結構、喜んでいたらいいね。

それまでは、特に日本人の代表団が来るとかというところ、日本赤軍の隊内通達が出て、例えば『何時から何時まで、どこに日本の社会党の旅行団が来るから、逃げろ、隠れろ』といわれていたのに、今年の戦争ではそんなこと気にしないでやれたからね。

パレスチナの人たちなどから『日本赤軍が、やっと、保安だなんていわないで、好き勝手にやっている』と冷やかさ



れたけど。

まあ、それまでは、日本赤軍としての行動は、いっさいしなかったから。  
公然とした軍事訓練にしても同じで、『味方を信用しないのか』と批判されたこともあったけど『私たちは、最悪の事態に備えている』と聞いていたんだけど。今度の戦争は、そんなものをすべて取り払って、自由にやっただわ。

まあ、悲憤感があったのも事実だけど、『勝つために戦おう』という意志の強さが集団化され、一つになると本当に強いね。  
それに、いろいろな国の人がいるから、『わが国の歴史にはこういうことがあったから、こうやろう』などと、いろんな知恵も出るのよ」  
——レバノン戦争が終わった後、現地に

82年7月——西ペイルートに対するイスラエル機の攻撃に対空砲で応戦するパレスチナ・ゲリラ





和光 晴生 (35歳)

(ジヨマ) 日本赤軍の政治局の大幹部。シンガポール事件など多くの実戦を指揮した筋金入り。



坂東 国男 (36歳)

元連合赤軍の幹部で、あさま山荘事件で逮捕されたが、クアラランプール事件で超法規出国。



松田 久 (34歳)

元赤軍派中央軍の兵士としてM(銀行襲撃)作戦に参加、クアラランプール事件で超法規出国。

つたが、各国のポランテニアの医者などから、「日本赤軍は、最前線で相当ががんばっていた」と聞かされたが。

「戦争といっても、これはあくまでも、いつもの戦いの延長なのね。いつもは事務所にいる人も、南部で戦っている人も、もちろんパレスチナ人も含めてみんなが、銃を取って戦ったことね。ささやかに戦ったということです。

みんなバズーカ砲などを盛んにやっていたんだけど、敵は『日本人の痕跡が残っていない』と、アンサール捕虜収容所では、捕まった全員に『アラブ名は〇〇

というヤバニー(日本人)はどうしているのか』と、何度も尋問しているのね。

今回の戦争で、一番激しい攻撃を受けて奪われたポフォール城でも、私たちの仲間が戦っていた。

そこには、パレスチナ人やレバノン人だけでなく世界中から、祖国を追われたわれわれと同じ年ぐらいの「パレスチナの子供たち」が「祖国のために戦いたい」と、大勢来ていたわ。

私たちはそれを日本語で『留学』と呼んでいたけど、とにかく非常に多国籍な南部戦線だった。

ヨーロッパやラテンアメリカからだけではなく、ほかにフィリピンやバングラデシュの人たちなど、アジア人もたくさんいて、われわれ日本人だけが特殊にいるという状態ではなかったのね。

そして、毛沢東主義者もトロツキストも、平和主義者も、みんな共存していたのが南部の戦場だったわけ。

# パレスチナ軍とイスラエル軍を包囲されたとき

——ベイルートで、イスラエル軍に包囲された時は、日本赤軍はどんな気持ちでいたのか。

「イスラエル軍が『ガラリヤの平和作戦』と称して、レバノン南部に攻め込んで来た時、正直、『これはやばい、最後じゃないか』と考えたわ。

つい日本赤軍というので、非常に注目していたようですけど。

私たちの考え方は、パレスチナの革命はパレスチナ人がやることであり、レバノン革命はレバノン人がやる。そしてイスラエルに対しては、パレスチナ人とレバノン人が戦うことを主体にして、われわれは、その指揮を受ける立場にあるという考え方だった。だから、隊列を分散して、それぞれの指揮下で戦ったんです。

## 仁義を大切に脱出断念

それは技術力に依じて、正規軍の訓練を受けている人は、ハルデの戦場に行くとか、新しくポランテニアで来た人は、キャンプの防衛をやるとかね。

前線といっても、組織された中央軍というのではなく大衆の軍隊だから、とても多彩で、四十歳のおじさんと結婚した十八歳の娘さんが、どうしても離れがたいといって九か月のお腹をかかえて墮胎

の中で戦うこともあったらしいわ——戦争が激しくなってきた、相当厳しい情勢になってもレバノンからの脱出は検討されなかったのか。

「何人かでもレバノンから脱出したらどうだ」といわれたことはあったわ。でも、この戦場は、反帝の最前線として守ろうという意志が強くて、結果として、生きるも死ぬも仕方がないと考えていましたね。

戦場から、逃げることもできたかもしれないけど、その途中で、フアランジスト(注・レバノンのキリスト教徒右派)民兵に捕まってしまうより、たとえ死んでも、日本人がこの戦場について戦ったという政治的意味のほうの方が、より新しい戦いを今後、日本の人が発展させる契機を保証するだろうと思っただけね。

それに、レバノンでこれまで活動させてもらってきたわけだから、それこそ『仁義を大切にしなければ』という『意気』というのもあったのね」

なかったようです。

ところが、私たちは客観的に見られるから、ベギン(イスラエル首相)がPLOのベイルートからの退却をこれまでになく強硬に主張していることや、敵と味方の戦力を比較すると、これは大変なことになると考えたんです。





イスラエル軍に制圧された西ペイルート

でも、私たちの考え方は、『悲観的すぎる』としりぞけられることが多かったんですよ。

しかし、私たちは『いつ、最後になってもいいように準備しておこう』という合っていたんです。

### 生死深く考えなかった

もちろん、そうはいっても、日本の同志のことか、友人のことか、いっさい気にならないかといったらウソで、大いに気になるし、それぞれ、葛藤はあったんですよ。衝動的には『最善を尽くしたいから、結果としては、生も死もある、死んでもいいや』と思っても、『ちょっとあれをし残したのを何とかしたいな』という気持ちもあった。

まあそれでも、私たちの肉体はなくて、国内の同志や友人たちが、戦いを継

続してくれるだろうという、確信ではな

いけど、ほのかな期待もあって、じたばたしないで、比較的生とか死を深く考えないで、明るくやっていましたね。

雑談なんかで、『もし捕まって、日本に帰されたらどうするか』という話も出ましたよ。『よく考えてみたら、何も自分には罪はない、無罪ではないか。なん

## なぜ、日本赤軍は、イスラエル軍に捕まらなかつたのか

——レバノン戦争で、イスラエルは日本赤軍をやっきになって捜していたようだけど、全く足跡を残していない。ペイルートで包囲された時も同様だ。爆破されたビルの中から、日本赤軍の資料が見つかったということもなかったが。

「紙一枚でも、そこに日本人が住んでいたとわかるものは、いっさい残さない

で俺は今まで罪人だと思っていたんだ。これは大間違いだった」という話もあったりして。

しかし、冗談ではなくて、いざ自分たちの罪名を見た時、なんでこんなあり得ないような罪名がついてくるんだっけということもあるのね。

こちらは、こちらで戦っているんだから、日本でどんな逮捕状を出したって構わないといって、それらと一つ一つ戦ってこなかった、そういう意味で日和見主義だったから本当のところ、自分たちでも分らないのよ。

捕まるといっても、私たちの日本赤軍暗黙の了解として、リッダ（注・奥平剛士ら三人のイスラエルのロッド空港襲撃事件）の戦士たちがそうであったように、イスラエルには生きて捕まりたくないという原則があるけど。でも、日本となるともっと違って、も

ように、徹底的に処分したのよ。これには、一つの教訓があったわけ。八〇年の頃かな、ペイルートのアラブ

大学の前で、爆弾が炸裂して、六十数人が死んで、二百人以上が負傷する事件があった、その時たまたまトイレにいた同志がいたんだけど、悪運が強いというか、ゆつくり歯を磨いていたおかげで、



し捕まったらそれはそれで国内にマイナ1な形で帰ったということ、そこからまた戦おうという感じで、『ようし、いっちょやろうか』という気分だったんじゃないかな」

トイレが防空壕の役目を果たして、ほかが全部吹き飛んだのに、その人はかろうじて命が助かったことがあったの。

そのアラブ大学の爆発の時は、日本人の新聞記者も写真を撮りに来たけど、その人たちに、日本語の書類を見つけれれば大変と、パレスチナ人に協力してもらって、大あわてで炉の中に書類を処分

アラブ空港襲撃事件の日本赤軍とアラブ空港襲撃事件の岡本公三

したこともあったのね。

その経験を生かして、今度の戦争では細心の注意を払ったわけ。

日本語の本は千冊以上もあるし、同志や友人たちの手紙もあつたけど、もしそれが一枚でも残っていたら、彼らに迷惑をかけるので、十分に注意したわ。

これは、七四年（注・前出の山田義昭の件を指すようだ）に得た教訓でもあるけど、最悪事態に備えるということとは、紙一枚も残さないようにすることで、すべての痕跡を消すことね。

日本製というので、洋服まで焼き捨てた人もいたくらいよ。

### すべての痕跡を消して

こんな作業をロウソクの光の中で、少しづつやるんだから、処分には一週間以上もかかったわ。読んでいなかっただい手紙を見つけて、読める楽しみもあつただけね。

これを見ていた、パレスチナの人たちは、『何でもそんなことまでやらなければいけないんだ。爆弾一つ落ちれば、何もなくなるじゃないか』と不思議がるのね。

でも、それが日本人とパレスチナ人の考え方の違いなのね。日本人的といわれるのは、一から十まで決めて行動する

けど、アラブの人たちは、長い先のこと決めても、決めたことにならない。だから、今日、明日に起こる大切な事に、集中してパツとやるわけ。

だから、どうなるか分からないのに、身の回りの処分をしていることが『またあ、考え過ぎじゃないか』という感じなのね。

『あなたたちがここで戦っているのは正義なんだから、こそこそしないで、堂々と顔を出せ。なぜ隠れるんだ』という感じなのね。でも、細心の注意を払ったおかげで、他の組織では、情報が漏れて大きな被害を受けたところもあるようだったけど、私たちはあまりなかった。

本当は、こちらから別の組織に出した書類まで処分したいと思っただけ……でも、それをやると、やり過ぎかなと思っただけ。そこまではやらなかったけど。

## 敵軍のベイルートからの脱出秘作戦とは――

――日本赤軍は、どうやって、あのベイルートから脱出したんだろうというものが、関心の的になっている。撤退の時は日本人のジャーナリストも大勢現地で取材をして、目を光らせていたし、何よりも、港ではレバノン軍の厳しいチェックがあつたが。

私たちは、レバノンのいろいろな組織やアラブの組織と比較的親しくしていたから、そういう人たちは、東ベイルートにも基地を持っていて、『ぜひ必要で、燃やせないものを持って行ってやる』といつてくれたけど、この際、『心新たに全部燃やしてしまえ』と全部処分したんですよ。

――しかし、PLOの発表として、日本赤軍は、われわれの一員として戦っているという発表が報道されたけど。

『普通パレスチナ人は、そういうのね。でも、私たちとしては戦っていることを口外してもらいたくなかった。何かがあつた時はパレスチナ人に迷惑がかかるし、もし、同志の一人が捕まれば、まだいるんじゃないかと追及される。だから、後でPLOのほうから訂正があつたと思えますが』

「出る方法は船しかなかったんじゃないですか」  
――PFLPの軍勢と一緒に船で南イエメンに行ったとか、何となくアジア人らしいのがいたという情報があつたようだけど。

### RとLの発音で苦勞

「まあ、似たようなところじゃないですか。でも、私たちだけがアジア人じゃ



佐々木規夫(34歳)  
49年8月の三菱重工ビルなど、企業爆破事件を起こした東



大道寺あや子(34歳)  
「狼」グループの一員、ダッカ事件で超法規出国。



浴田由紀子(32歳)  
東アジア反日武装戦線「大地の牙」グループの一人。ダッ

カ事件で超法規出国。

なくて、いっぱいアジア人はいましたからね。

船に乗る時、レバノン人の検査があつて、その時、自分の名前をいわなきゃいけないのね。でも、日本人は、どうも発音が悪いのよね。どんなにがんばってもアラビア語の「RU」というのをじょうずに発音できるのが半数ぐらいしかないし、おまけに、「R」と「L」の発音の区別ができないから、できるだけ名前







に『R』とか『L』をつけないようには工夫したんだけど。

それでも、港でレバノン人から『何人だ』とチェックされると、どうにも発音が悪いから、疑われるのね。

そうすると、後からアラブ人がドッと押しかけてきて、『ハラス、ハラス(もう終わりにしろ)、こいつらはパングラデシユ人だ』といったりして。まあ、ベイルートから出るのは、そんなに難しいことではなかったんですよ。とにかく、

船で出る方法が大半の方法だったんじゃないですか。あと、残された方法といえ、イスラエル軍の包囲が解けた時、普通の旅行者としてベカー高原に戻るとい方法じゃないかしら。

私たちは多いんですから、船で出て行くといっても、大変な量ですからね……まあ、人数はノーコメントだけど——P.L.Oがベイルートから撤退した後、もしかししたら、日本赤軍は、キャンブに残っていたんじゃないかという噂も

▲82年8月23日レバノンを撤退するパレスチナ・ゲリラ  
あったが。

「それは、ちょっと答えるのは難しいですね」

——しかし、西ベイルートはイスラエル軍にシラミつぶしに調べられたし……。

「そうはいつても、パレスチナ人のキャンプの周囲とか、西ベイルートは徹底的にやられたけど、東ベイルートは、右翼の地域ということになっていたので、搜索はないしね」

——右翼のど真ん中にいたという可能性もあるのか。

「普通は、そういうところにいることが多いんじゃないですか。そのほうが安全なこともあるし」

——しかし、よく日本人に見つからなかったものだ。

「よく日本人には会うんですよ。ただ向こうは気がつかないけど。日本人が来ると、よく見えているんですよ。」

私たちが日常的にやらなくても、レバノンの人たちはなんかが、日本の非常に反動的な〇〇新聞の記者はどこに住んでいて、何時にどうしているかということ、いつも私たちの元へ知らせしてくれているね。

また、日本大使館で一人だけ、いつもレボで西ベイルートに來ている大使館員がいるんだけど、彼が、大使館をいつ出たか、今、どうしているのかということまで、詳しく知らせてくれるのよ。

日本大使館が襲われて、物を盗まれる事件があった時も、それも教えてくれたわ」(次号に続く。注は編集部の実)

※次号ではいよいよ、日本赤軍はこれから一体何をやるかとしているのか、再びハイジャックを企てているのか。そしてパレスチナ・ゲリラを含めた国際過激派グループとの結びつきは——など、いっそう核心に迫ります。(編集部)

「私の京都」①

## 洛北の秋

洋画家独立美術協会会員 (なからよしと)

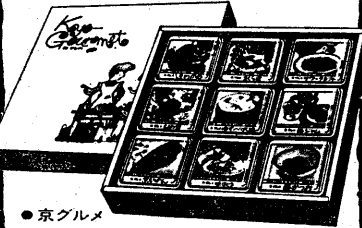
中村 善三

洛北の秋は見事である。故郷の和歌山を離れて昨春、アトリエを作ったので、この窓から目の前に迫る山の紅葉のすばらしさ、比叡の峰のすがくしさを毎朝眺めては、私は、あゝ京都に住んでよかったですと思う。深泥池もすぐ近くなので毎日そのあたりをさまよい歩く。京都の持つ長い歴史が、この都の持つ深い心が私の身体や魂を包んでくれている。私はそれにこたえてより美しい芸術を、より深くきびしい絵を作らなければならないと思う。

新発売

ヘルシーライト級 新・京つけもの

## 京グルメ



●京グルメ  
1,000円～8,000円  
8セット取り揃えています

ご注文はお電話でも

大安が責任をもって、京都発全国ゆき直急便でお届けします。

☎075-761-0281代

カタログのお申しつけは………  
株式会社大安 〒606 京・左京区平安神宮東

手づくりの京つけもの

# 大安

本店/京都平安神宮東 河原町店/京都河原町三条  
東京・名古屋・京都・大阪・神戸・各有名百貨店

# 日本赤軍 重信房子 独占会見記

## 第2弾



重信房子(左)にインタビューするフォト・ジャーナリスト広河隆一氏

重信房子(37歳)は、ラフ名・マリナム。昭和46年2月、テルアビブ空港事件で自爆した奥平剛士と偽装結婚してベイルート入り。日本赤軍の政治委員会のリーダー。

広河隆一氏  
昭和18年天津生まれ。早大卒。昨年9月のパレスチナ人虐殺事件では最初に現場に入ったジャーナリストで、この一連の写真で五十七年度後期「よみうり写真大賞」を受賞。写真集、著書多数。

日航機をハイジャックしたダツカ事件(52年9月)以来、従来の「作戦」を休止した日本赤軍は、これから、一体何をやるうとしているのか――。

日本赤軍のリーダー重信房子は「平和的な活動も大切……」

と言いつつも、「敵がモンスタリーなら……」と、武闘路線には言葉を濁す。そして、パレスチナ・ゲリラとの関係は、「今が、最も強固な結びつきのある時」と断言し、共闘への自信をうかがわせている。(編集部)

# 次は鞍馬天狗路線を狙う

国内の闘争に呼应し、平和的な活動も大切に

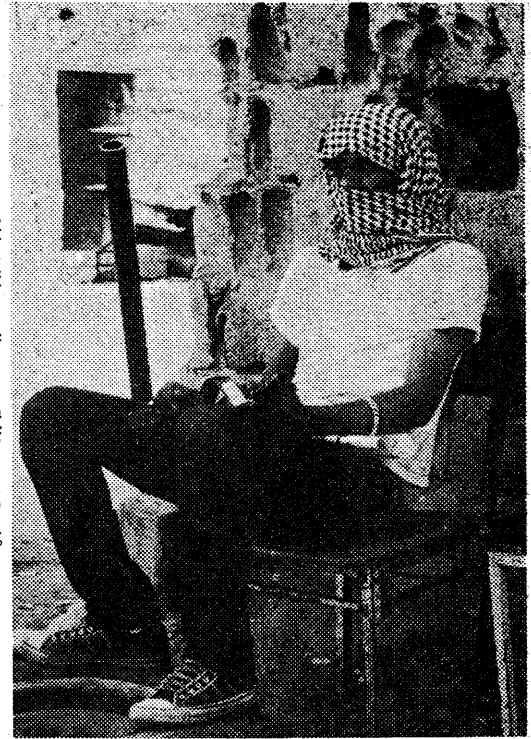
——日本赤軍は、これから何をしようとしているのか。ベカー高原の情勢は、相当厳しいし、再びイスラエルが全面攻勢に出た場合、どうするつもりなのか。

重信 私たちが決めているのは、このベカーに結集した、すべての反帝国主義の勢力とともに戦い抜くことです。

この勢力は、パレスチナ革命の主体であるパレスチナ人であり、また、アラブ、レバノンの人たちでもあります。ベイルートには、日本では名前も聞いたことがないような、五十以上の少数民族の人たちがいましたが、その人たちもみんなベカーに集まっています。昨年レバノン戦争で死んだ数より、もっと多くの人たちが世界中から集まっていますよ。

まあ、再結集といっても、ずっと結果していたんだから、今さら、再結集も何もないんですけどね。ここで、彼らは、根拠地を作って、何とか防衛し、国家権力の及ばない、解放区にしようとしているわけね。





キャンプの入り口で銃を手にした兵士が見張る

そこでは、モラルと規律が厳しく守られているから、共に、反帝の闘いをやるのね。その闘いには、もちろん平和的な方法もあるし、暴力的な方法もあるわけで、各組織、各人のレベルに応じた方法で共闘しているんです。

それは、日本赤軍は具体的にどんな「闘争」をやるかというのか。  
 重信 私たちの展望としては、まず、微力ながらも反帝闘争を国際的、国内的に作り上げていく一助になりたいということです。平和的な活動も大切で、国内の反動に対する、国内の闘いに呼応した私たちの闘争を作り上げていくことも、大切な仕事だと思っています。  
 六〇年、七〇年の全共闘運動の高揚が人民の革命の根拠地を、世界に形成したということ。つまり、日本人民の国際部が、既に国外にできているんだという位

### 日本赤軍事件簿

- ▽テルアビブ空港事件(47年5月30日) 奥平剛士・安田安之・岡本公三がイスラエルのロッド空港を襲撃。100人以上の死傷者を出し、岡本を除く2人は自爆。
- ▽日航機ハイジャック事件(48年7月20日) 丸岡修らがバリ発東京行きの日航機を乗っ取り、リビアで機体を爆破後投降。
- ▽シンガポール事件(49年1月31日) 和光晴生らが製油所を爆破。同時に、クウェートでパレスチナゲリラが日本大使館を占拠。
- ▽ハーグ事件(49年9月13日) 奥平純三らが在ハーグ仏大使館を襲い、仏当局に拘留中の山田義昭を奪還。
- ▽クアラルンプール事件(50年8月4日) 奥平ら5人が在マレーシア米大使館を占拠、日本で拘留中の西川純ら5人を超法規措置で出国させる。
- ▽ダッカ事件(52年9月28日) 坂東国男ら5人が日航機をハイジャック、大道寺あや子ら6人を出国させ、約16億円を奪う。

置づけなのね。  
 もちろん、我々は、どんな左翼の人とも敵対しないし、一緒にやれる機会があれば、一緒にやっていけるはずと思う。でも、日本の左翼運動は、人民から見ても、歴史的に見てもやはり国際主義というのが欠けています。

再び、厳しい批判のあるハイジャックをやるつもりなのか。  
 重信 私たちの教訓からいえば、人民性、政治性のある闘いをしようというのが、常に原則なのね。だけど、敵が大きくモンスターで、こちらは豆粒という対時関係では、最良の方法といっても、常に限界があります。  
 だけど、こちらが豆粒だからといって人民性、政治性を常に踏まえていなければ

### ドツと拍手が起ころよ うな戦術を考えないと

何といっても、国際的視野で物事を捕らえるということが、日本の階級闘争の中で、非常に欠落したことなのね。  
 そうね。闘う形態には、いろいろあるけど、今は、あれだ、これだといえないけど……。

つまり、同じ作戦にしても、「これは限界があるなあ」と考えてやるのと、とにかく「勝てばいいんだ」というのとでは、やっぱり活動の仕方が違うのね。  
 例えば、日高隊の人たち(注・52年9月のダッカ事件。日航機をハイジャックして、奥平純三や東アジア反日武装戦線『狼』グループの大道寺あや子、強盗殺人で服役中の泉水博規措置で出国させた丸岡修やなどの犯行グループを指す)「このやり方は間違っ

ば、「闘争」が単に自己目的化することになってしまふのね。  
 例えば、翻訳という作戦過程の中で一時期あったことだけど(注・「翻訳作戦」とは七四年の在ヨーロッパの日本人商社マンの誘拐計画。この計画は山田義昭がフランス当局に逮捕されたため、実行できず失敗した)、日本の商社をやるうとして、ある日本商社の支社長の行動を見張っていたら「どうも難しそうだ」となったらしいのね。そこで、今度は「それなら、支社長の奥さんでどうだ」という話もあったらしい。もちろん、そんなことはしなかったけど、このように、発想がどんどん貧困になってしまふの。たしかに、自分たちのやれる範囲はいつも限られているのは事実だけど、常に人民性のある闘いをしようという目的意識に沿って作戦を考えないといけないんです。

か「限界があるんじゃないか」と考えていたからこそ、人民に対して、人質に對して、「申し訳ないです」という態度が出てきたんじゃないでしょうか。

あの時(注・前出のダッカ事件)は、前代未聞のアンケートか何かを取って、後でそれを見せてもらったんだけど、「こーやってほしいんじゃないか」と、戦術を示唆してくれた乗客もいたわ。

その中には「日本赤軍は、野蠻であるだけいわれているけど、もう少し、公害企業の社長とか、みんながいやだなあ」と思っているのを、やってほしいじゃないか」というのがあったの。

我々は、なるほどと聞いて、これを「鞍馬天狗路線」と呼んでいるんです。まあ、実行はし切れていないけど、要するに、頭でひとひねりして、考えなければ理解できないような作戦をやられても困るといふのね。それより「鞍馬天狗

だ」といって馬に乗ってバカバカやって来て、ドツと拍手が起るようなやり方をしなさいというのね。

### パレスチナ人との心の

### 絆つくったリツダ闘争

レバノン戦争が終わった頃、中東を取材中に、ベイルート町の町などに、テルアビブ空港襲撃事件の岡本公三と、死んだ奥平や安田の三人のポスターをあちこちで見かけたが。

重信 七二年五月三十日のリツダ闘争(注・テルアビブ空港襲撃事件)は、自らの命を犠牲にしても、パレスチナの民族の大義のために闘われたんだけど、私たちが考えていた以上に、パレスチナやアラブの人たちに共感をもって受け止められたということなんです。以来、毎年、この日に

なると、普通のおじさんやおばさんたちが、花なんかを持って来てくれるわけね。だから、このリツダ闘争の日を、「国際主義のために闘った日」として、私たちの兵舎の一つを開放して、明け方まで飲んだり、騒いだりするのよ。

昔は、例えばPLOなども、中でいろんな組織がいちがみ合っていたから、今日はこの組織、明日はこの組織と、彼らがカチ合わないように別々に招待していたのね。でもそのうち、この組織を呼んでここを呼ばないというのでは、それが元で、彼らに内ゲバが起るといけないので、そのへんにポスターを張り出して、自然に来るのを待つことにしたの。

イスラエル軍が来そうな緊張した中でも集まりはあったのか。集まりではどんな事をやるのか。重信 ちゃんとやりました。いつも終わりが遅すぎるから、もっと早く始めて、早く終わろうとしたんだけど、結局、いつもの通り、遅くなってしまったわ。最初の頃は、政治的な総括とかが多かったけど……。

最近ではみんなで、歌ったり踊ったりして、大騒ぎするのね。何年前までは、パレスチナ側は、いつも歌が盛んに出て、こちら側は乏しくて、あまり歌えないという状態だったんだけど、最近では、私たちが自分で歌を作って、負けずに歌うようになったわ。

——PLOの人たちは、果たしてみんなが、あのテルアビブ空港襲撃事件を支持しているのだろうか。重信 それは、全部の人たちが支持して

# ひと味、乗りが違ふ。

足元が振動してリズムをききまむ。カラオケファン待望のステージ登場。これでお店も大繁盛!!

カラオケファンに拍車をかける人気者が登場。ステージに立ち、リズムが振動となって体に伝わります。臨場感満点の快感はアイクだけでは味わえない。臨場感、これ一台でカラオケが十倍、二十倍楽しめます。あなたのお店の大繁盛は是非どうぞ。

## ボディソニックカラオケステージ

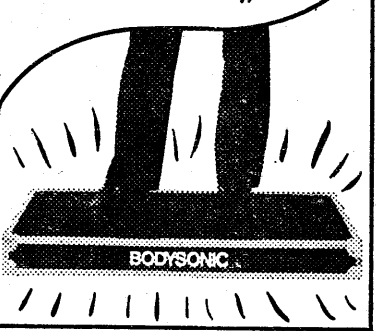
ボディソニックカラオケステージの魅力を是非体験してください。お申し込みは、お申し込みの03-5900-0000(リ)15時月々5900円(税別)

販売代理店募集中心!

保証金・権利金不要。詳しくは下記までお問い合わせください。

ボディソニック株式会社

東京都港区南青山二丁目新青山ビル東館4階電話03-5401-0001

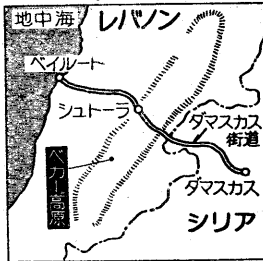




# こうみる



ベカー高原をパトロールする兵士



レバノンには、イスラム教徒派のレバノン政府に対する大攻勢で、再び戦火に包まれている。平和維持軍の名目で駐留していた米軍も、内戦に本格介入せざるを得ない状況だ。こうした中で、PLO(パレスチナ解放機構)の巻き返しも活発になって

いるといえるわ。  
——それは、一般のパレスチナ人の人たちはどうなのだろうか。

重信 パレスチナの人たちの中で、五月から六月に生まれた子供の名前に、バシム(注・奥平剛士のアラブ名)とかアハマド(注・安田安之のアラブ名)とつけた大勢の人も知っています。もう、ずいぶん大きくなったバシムもいるわ。

それに、こちらから別に、彼ら(注・奥平ら)三人の写真を配ったわけでもないのに、新聞の切り抜きから取った写真を、殉教の戦士として壁に張って、大事に保存しているのね。それはごく普通のパレスチナの人なのよ。

パレスチナ人にしてみれば、これまで外部の人間は自分たちを利用するばかりだったのに、やっと、自分たちのために血を流してくれる人が現れたということ、パレスチナの人たちにとっては、大

きた。

果たして、このような中で日本赤軍の今後はどうなるのか。中東問題の専門家はそのように分析する。(編集部)

ハイジャックは返上?

中東経済研究所常務理事

小山 茂樹氏

今後の中東情勢は、確たる展

変なことだったのね。

あのリッダ闘争以降、あまりにも反響が大きくて、期待も大きいけど、私たちがとしては実力はないから、これを受け止められなかったのが実情だと思うけど……。

また、リッダ闘争は戦術としても、民族的にはパレスチナの大義を実現したと思うけど、国際主義を実現する方法としては、果たして大きな普遍的な意味を勝ちとることができたかといえば、いろいろ問題もあった。

例えば、プエルトリコの人たちがたくさん死んだため、多くの批判もありました。プエルトリコの革命家たちが「私たちの抑圧された仲間、決してイスラエルになど行かない。私たちは君たちと一緒に闘う」というアビールもあつたけど、それでは、「一緒に闘える戦術とはどのようなものか」と考える日々が続きました。

望を持ちえないというのが現実です。というのも、もともとレバノンには、キリスト教徒とイスラム教徒の対立という国論を二分する問題があり、そこにシリアが自らの生きる道を見いださうと、この問題をどう利用していくかということ、複雑にからみ合っているからです。

またアメリカは、強引にレバ

は、必ず私たちを助けてくれるという根拠を形成していると思うわ。

パレスチナ人が、イスラエルに捕らわれている人の奪還闘争をやる時は、必ず一番初めに、岡本公三を指名する。それに昨年、ベイルートがイスラエル空軍に猛爆撃を受けた時も、直撃弾が当たったら一発で死ぬという状況なのに、避難した地下室で私たちを、できるだけ内側に隠してかばってくれたりしてくれるのよ。

## PFLPとは兄弟同然の長く親密な付き合い

——さて、最近ではPLO内部でも激しい対立があるけど、いわゆる共闘といっても、現実にはずいぶん難しい情勢もあると思うが。

重信 私たちは、七四年まではPFLP以外の組織とは付き合い合えないことになってきた。それからは、他の組織の人とも付き合い合えけれども、やはりPFLPが中心でしたわ。

これまでの作戦過程を通してみても、共同の助け合いの中で、何といってもPFLPとは、歴史的な絆があるしね。革命的な絆とか、義理みたいなものもある。いわば兄弟みたいなものではないでしょうか。昔からいたずらし合った友達が、今では司令官になったりしてね。

たしかに、パレスチナの人たちと私たちは、すべてが同じというわけではない

# 重信インタビュー 識者は

ノン・イスラエル撤兵協定を締結させた経過もあり、レバノンの現政府であるキリスト教徒政権を、支持せざるを得ない立場に追い込まれています。

一方、中東問題の一方の当事者であるPLOは、アラファト議長と反乱派の対立が解消されないまま、より内部分裂が深刻化していくと思われるが、この分裂を回避するためにPLO全体が、左傾化する、いわゆるタカ派が前面に出てくる可能性が大いに考えられます。

こうした中で、日本赤軍は前線で一兵士として闘うことはもちろんですが、さまざまな情報を収集・分析して、日本赤軍ならではの闘争手段を編み出すことに重点が置かれるでしょう。かつてのハイジャック闘争やテロ行為はあまり考えられません。

こんな闘争手段をとっても、何にもならなかったということ、彼ら自身がよく知っているからね。

現在、彼らのいるベカー高原は、いわば国際政治の真空地帯ですから、シリアが彼らをそこから追い出さないかぎり、彼らはじっくりと腰をすえて長期戦略を練り上げると思えます。

## 各党派との連携強まる

中東問題評論家

北沢 正雄氏

中東情勢は、日々緊迫の度を深めています。全体のカギはアメリカの動向にかかっています。

現在アメリカは、レバノン沖に海兵隊を中心に海軍力を結集させて、状況の推移をながめていますが、この軍事力が全面的に投入された時、それは、第二のベトナム戦争を意味します。しかも、レーガン大統領はこの道へ踏み込む可能性が大いにあります。

いったん、アメリカの軍事力が投入されれば、一気に米ソ対立にエスカレートするかもしれません。

こうした中で、日本赤軍にとって、今ぐらゐ精神的に楽な時はないと思います。パレスチナ解放勢力各派が長期戦の構えに入り、そうした中で、日本赤軍も一党派として認められていまずからね。つまり彼らも、パレスチナの闘う主体として自由に、各党派との交流が行え、共同闘争を組める立場にあるわけですよ。

そこで、彼らのこれからの闘いとして出てくるのが、近代技

術のアキレス腱を突くような闘争手段でしょう。

たとえば、バチンコ玉一つをジェット機のエンジンにほうり込むだけで、そのジェット機を飛行不能に追い込むような、そんな闘いを展開するでしょう。

そして、この闘いは日本赤軍だけでやるというのではなく、パレスチナ解放勢力各派との連携のうえでということが大いに考えられます。

ですから、同時多発とか、時間差とか、いろいろなパターンが考えられます。

いま彼らは、こうした闘いをどこで、どうやるかに知恵をしぼっているのではないのでしょうか。

のね。例えば、パレスチナの人たちは、誰も銃を持つて、いわば大衆の軍隊で、良くも悪くも、生活に支えられて、みんなの力でやっているのね。だから、指揮官が指揮する時は、命令についての各自の自主的判断の幅を非常に小さくしようとするわけ。

でも、私たちはその作戦を担う当事者が自主的に判断するようにしてこそ、その闘いが、突発的な

事件や、状況の変化に応じて成功すると考えるのね。

だから、パレスチナの人たちが、善意で我々を、彼らの組織の一員として扱うことが、最良のもてなしだと思うことが、逆に我々には支配と感ずることもあるのね。こちらはこちらで、自分たちの独自性が要求されているわけだから。

だから、ヨーロッパから来た人たちの中には、それらの矛盾で、もう一緒にやられていけないと出て行く人もいるわね。でも、私たちは、ここでの考え方を軸に、日本の中で見てきた考え方を、もう一度対象化して、これを日本でもなく、パレスチナでもなく、国際主義というもつと普遍的なものに立脚して考えようという、比較的柔軟な立場だから、やってこられたと思うわ。

実際に矛盾や対立もあつたわね。例えば、生活上のことで、「護衛をつけてやる」といつてくれるのを、「いや自分たちでやる」といえば、対立になるもの。私たちは、人に頼らなくてもいいだけの力をつけたら、その時は人に頼ろうという考え方なんだけど、これは、アラブ的、そうイスラミ的な考え方からすると、とても「水臭い」ことなわけね。

でも、彼らと、こういう矛盾や対立を乗り越えて、あの激しいレバノン戦争を経た今こそが、本当に、一番強固な関係にあると断言できると思うの。(丁)

(注の文責は編集部)



●レバノン内紛  
ベイルート国際空港の滑走路端の塹壕から砲撃の続くシューフ山岳地帯を観測する米海兵隊(AP)